

第4回J L P P 翻訳コンクールは、小説部門、評論・エッセイ部門のどちらの課題も易しいものではなく、それだけに翻訳者の力量をはっきりと試すものになったと思う。古井由吉「辻」は、現代日本散文の極北ともいうべき密度の濃い文章で、日本語特有の柔軟な構文を駆使し、厳しく簡潔な表現の中に多くの複雑な陰影を盛り込んでいる。課題作品選定にも携わった側として率直に言えば、「難しすぎたかもしれない」と後悔しかけたほどだったが、実際に応募作を読み進めるうちに、予想以上の喜びを味わうことになった。この難しいテキストに取り組んだ若い応募者たちの努力に胸を打たれたからである。かつてドナルド・キーン先生は別の翻訳コンクールの席で、「課題文は難しい方がいい」と主張されていたが、その意味が今回はっきり分かった。

他方、小沼丹の達意の随筆は明快で面白く読めるのだが、翻訳者にとっては別の意味で大変難しいテキストだった。表面的な意味だけ取って訳しても、ちょっととぼけたような飄々たる諧謔味がまったく伝わらないのである。ユーモアはかくも文化的なもので、特に翻訳が難しい。また動植物の名前が頻出するのも日本の随筆ではごく普通のことだが、これがまた翻訳者泣かせである。日本でごく普通の鳥がロシアには存在せず、いったいどのような名前を当てればいいのか、あるいは訳注で説明するべきかなど。翻訳者の悩みは尽きない。

このような課題の難しさを考えると、今回の応募者総数は決して少ないものではないだろう。また審査の結果、最終候補に残った応募者がすべて、これから活躍が期待される若い世代だったことも、非常に喜ばしい。ロシアにおける日本文学への関心の高まりと日本語習得の高い水準を端的に示すものである。

審査の際には、誤訳の有無とか、細部のミスといったことよりも、全体として翻訳がロシア語作品として成り立っているか、ということに重点を置いて検討した。最優秀賞に選ばれたコヴァリョーヴァ氏の翻訳は、原文を読み抜いたうえで、逐語的な対応ではない適切な表現をロシア語に探し出すことに成功している。ヴァリエヴァ氏とプロホロワ氏は語彙の選択や注の付け方などの点で改善の余地があると思われたが、しなやかな言語感覚でそれぞれの持ち味を發揮して「読ませる」翻訳作品に仕上げていた。嬉しいことにそれら受賞三作以外にも、甲乙つけがたい優れた応募作が多く、さらに3名の方を奨励に値する作品として選出することになった。椀飯振舞のように見えるかもしれないが、実は若い翻訳者たちの努力の成果に元気をもらったのは、私たち審査委員の方だったような気がする。今回の受賞者たちが、今後、ロシアにおける日本文学の翻訳の新しい波を作り出してくれることを期待したい。

沼野充義